



TITLE:

羅振玉・王國維と明治日本學界と
の出会い：「農學報」・東文學社時
代をめぐって

AUTHOR(S):

錢, 鷗

CITATION:

錢, 鷗. 羅振玉・王國維と明治日本學界との出会い：「農學報」・東文
學社時代をめぐって. 中國文學報 1997, 55: 84-126

ISSUE DATE:

1997-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177803>

RIGHT:

羅振玉・王國維と明治日本學界との 出會い

——『農學報』・東文學社時代をめぐって——

錢

鷗

同志社大學

羅振玉（一八六六—一九四〇）と王國維（一八七七—一九二七）二人に關しては、それぞれ「收藏大家」、「國學大師」と一般に考えられている。そうした彼らの生涯の終結した時點から築き上げられた人物像にとらわれていると、二人の人生の前半、ことに上海時代は、なんとも不可解なものに思われるかもしれない。一見すると「舊學」とはまるで縁のない仕事に没頭していたかに見えるからである。しかしながら、上海時代こそ彼らの自己形成のうえで極めて重要な時期であり、後年の學術上の達成に至る基を作ったものなのである。

一八九七年、日清戰爭後に於ける維新運動の氣運、そして學會・新聞・譯書のブームに應じて、羅振玉は蔣黼らとともに上海で務農會を起こし、近代中國に於ける最初の農業專門誌『農學報』を創刊した。翌年の三月、羅振玉、汪康年など五人が更に出資して東文學社を上海で設立した。『農學報』と東文學社などを通して、羅振玉、そして當時『時務報』の書記、東文學社の學生であつた王國維は、古城貞吉、藤田豐八をはじめとし、田岡嶺雲、内藤湖南、狩野直喜など日本の學術界の最先端を代表する帝國大學グループと出會い、京都時代を経て、やがて日本學術界と生涯にわたる深い縁を結ぶことになった。『農學報』の運営、東文學社の設立、翻譯出版、及び羅振玉・王國維・藤田豐八をめぐる周邊關係については、すでに様々な先行研究が存在する^①。しかし、『農學報』は後に「各國」の中でもことに日本の農業關係の書籍の翻譯と、農業に關する制度、教育及び農業技術の紹介がかなり大きな比重を占めるようになり、東文學社は名前の通り本來日本語の專門學校という趣意で設立されており、その教師と教務主任に相當す

るものもすべて日本の學者で、カリキュラムの編成・教科書内容なども日本人學者に委ねて教育を推進していた。なのに、これまで東文學社に關する研究では、羅振玉らの近代日本觀、東文學社を通しての日本學者との交遊の實態、それが彼の事業全體にどのような作用をしたのか、そしてその學生であつた王國維の學問的成長において東文學社時代はどのような意味をもつのかなどのが、ほとんど顧みられていないのである。要するに、當時における羅・王と日本學術界との交流は從來あまり丹念に検討されなかつたため、彼らの學者としての生涯における東文學社時代も當然それほど重要なものと見なされなかつたのである。本文は、ここで先行研究を踏まえながらも、從來あまり顧みられなかつた、『農學報』、東文學社をめぐる近代日中學者、學術交流の様々な關係を中心に検討を試みたい。

一 日清戰爭後の中國に與えた日本の衝擊

一八九五年四月、日本と清國の間で「下關條約」が調印された。この條約によつて、日本は中國において、アヘン

羅振玉・王國維と明治日本學界との出会い（錢）

戰爭以來西歐列強が獲得した以上の利權を手に入れることになつた。すでに西歐各國に開かれていた貿易港・都市に加えて、日本は更に沙市・重慶・蘇州・杭州の諸都市を開放させた。それによつて、日本國民は自由に中國に行き、住み、工商業を行うことができる様々な特典を有することになつた。日清戰爭後、突然に目の前に開けた「新大陸」に對して、勝利の興奮と混じつた功名心の高揚は、日本國內の政・工・商・文教を含めた各界を沸かしていた。中國吞滅論者にせよ、日同盟論者にせよ、「商戰主義」者にせよ、文明推進論者にせよ、空前の「中國進出」のブームは、政府から民間に至るまで、日本全體で盛り上がったのである。^②中國においても、日清戰爭後における日本人の來訪、日本に關する情報量の激増は、やがて戰爭そのものと絡み合つて中國の近代史に大きな衝擊を與えることになつた。

日本側の進出熱に對して、中國側もただ受け身であつたわけではない。日清戰爭の敗北を一つの契機として、「變法」「自強」をスローガンに掲げた維新運動が中國で繰り

廣げられていった。近代化の啓蒙といふべきこの運動の中で、日本の存在は大いに注目されることとなった。明治維新という日本の取った道は、一時期、中國の改革のモデルとされたのである。日本書を譯し、日本へ留學生を派遣し、日本の政治・教育など各種の制度を取り入れた。そのために、この時期からしだいに、世の中のいわゆる「新學」は、すでに單なる「西學」ではなくなっていた。新學を取り入れる學校・書院の外國語教育に日本語を教える所もあらわれ、新聞雜誌における外國の情報（社會情勢・歴史地理・新しい學術など）紹介は、東西兩洋の比重が對等になり、そうしてはじめて完全の「新學」といえると考えられるようになった。

二 『農學報』から始まった羅振玉の日本との 關わり

1 『農學報』の日本語翻譯と古城貞吉

日清戰爭後のこのような日本ブームは、當然のことながら、羅振玉らの務農會・『農學報』の事業にも影響を與え

ずにはおかなかった。

一八九六年十二月、務農會が最初に出した計畫「務農會公啓」には、『農學報』の構想について「翻譯農書、並創刻農學報章、專譯各國農務諸報及本會開辦後一切情形」と書かれている。「各國」の農業關係記事を譯するという方針であるが、その「各國」の中に特に日本のことは明言されていないものの、その頃、羅振玉・蔣黼の汪康年に送った書簡によると、

前託代延東文繙譯、未知已否訂定？繼思僅譯東文、究未免偏而不全、鄙意欲二者並舉、每期譯書四種、東西各半、……（『汪康年師友書札』、二九二八頁）

と書かれ、つまり最初は専ら日本語の翻譯を意識していたことが分かる。

一八九七年四月、『農學報』創刊の一月前に「時務報」に掲載された「農會報館略例」には、「本報專譯東西農學各報及各種農書」と「本館設……東文翻譯一人、英法文翻譯二人、每月束脩各□十元」^③と、初めて日本語の翻譯が書かれている。その「略例」から、『農學報』の翻譯内容に

は日本語の農學關係の文獻を含めてゐること、のみならず、日本語の比重は英語・フランス語と對等に置かれてゐることも分かる。

一八九七年五月、『農學報』の創刊號の冒頭に置かれた「農學報略例」はさらに上記の「農會報館略例」を修正し、翻譯について、「本館設理事二人、一總理庶務（蔣黼を指す）、一潤色書報（羅振玉を指す）、毎月束脩各二十元」とあるのに對して、「日本翻譯一人、毎月束脩六十元、英文翻譯一人、毎月束脩□十元、司帳一人、毎月束脩四元……」と改めてゐる。ここではフランス語がなくなり、英語と日本語は半々を占め、しかも日本語翻譯の給與は他を遙かに凌いで最高額が明示されてゐる。

『農學報』の創刊號にはまた、馬良の「馬湘伯務農會條議」^④が載せられてゐる。その中に「報中所譯書、先就日本、取其同於我也、英・法・德・美、其種植糞溉與我迥異、異故難以取法、同則易以爲功」と主張され、それに續いて日本の農書のリストも附されてゐる。この「條議」は『農學報』の創刊號にはじめて公表されたが、これ以前にも、務

農會設立の準備段階において、羅振玉らは務農會の章程の起草や運営・翻譯について馬良に負うところが多い（羅・蔣などの汪康年に宛てた書簡による）。馬良のこのような意見は、『農學報』で後に日本の農學關係の書籍の翻譯と、農業に關する制度、教育及び農業技術の紹介がかなり大きな比重を占めるようになることに作用したであろう。

務農會・『農學報』の開始時期における羅振玉・蔣黼は、交遊も狭く經驗も貧しいため、彼らが上海の新聞界・學界で近代農學の啓蒙事業を興すのに、外國情報源の保有、外國農業技術者、翻譯者の招聘などに關しては、すべて汪康年を中心とする『時務報』グループに負わなければならなかった。羅・蔣が上海に赴く前に、『農學報』の翻譯及び外國學者の紹介に關して、すでに手紙で汪康年とやり取りをしてゐた。例えば、一八九六年の冬、羅振玉の汪康年宛の書簡には次のように書かれてゐる。

而購買機器、聘請農師、及做行日本鐵棒打井等法、非託諸東人・西人不可。茲專誠投前、擬先與尊館繙譯古城君議之、若西方學者、閣下交遊中定不乏人、尙乞一

言爲介、俾得有成。(一八九六年十一月五日、『汪康年師友書札』三二五三頁)

また、務農會の活動より『農學報』發刊を先行することを決めたとき、次の蔣鼐の手紙に見えるように、羅・蔣は更に農書の代購と翻譯者の招聘を汪康年に依頼した。

『農學報』及農學書已承代購、尤爲神速、佩服。將來繙譯之事、弟等意中竟無其人、尙乞代爲延訪、或逕請貴館繙譯諸君兼辦此事、當酌送薪水、以資補貼、統乞尊酌施行。(一八九六年十二月九日、同上二九二七頁)

ここに出た「尊館繙譯」の古城というのは、すなわちかつて最初の中國文學通史『支那文學史』を草したといわれ、近代中國文學史研究の先驅者として名高い古城貞吉(一八六六—一九四九)のことである。

しかし古城貞吉に關しては、詳細な傳記が乏しい。『東方學』(第七十一輯、一九八六年)の中の「先學を語る——古城貞吉先生——」の後に付されている「古城貞吉先生年譜」には、明治十九年(一八八七年)以後、同三十年(一八九七年)までの十一年間がまったく空白になっている。年

譜の「明治三十年」のところには、「十二月日報社(後の大阪毎日新聞社)に入社、清國上海に遊學」とのみ記されている。「清國上海に遊學」というのが、汪康年らの『時務報』の日本語翻譯に聘されたことを指しているのか、或いはほかに遊學の目的があつたのかが判然としない。もちろん『時務報』そして後に『農學報』の日本語翻譯や日本の書籍・新聞の代購擔當などの職に就いたこともまったく記されていない。

また古城貞吉の上海行について、「先學を語る——古城貞吉先生——」(一九三・二〇六頁)では、明治三十年(一八九七年)十二月、はじめて上海に行つたと記している。しかし一八九六年(光緒二十二年七月二十一日)の『時務報』第三冊にすでに古城貞吉譯の「東文報譯」が載せられており、同冊の「本館辦事諸君名氏」にも「東文繙譯、日本東京古城貞吉(日本近習西法・譯西書甚多、以東文譯華文較爲簡捷、今除譯報外、兼譯各種章程並書籍)」と記されている。それによって、遅くとも明治二十九年八月以前に古城が『時務報』の招聘に應じ、正式にその翻譯人員として仕事を始

めていたことは間違いない。

その後、古城貞吉が時務報館の翻譯擔當になってから、本人がずっと上海に駐在していたかどうかとも上述「年譜」からは分からないが、上海にはじめて行った當初から日本と上海を行き來していたことは、上記羅振玉の手紙に「茲專誠投前、擬先與尊館翻譯古城君議之」とあるところから知ることができるし、また當時古城が汪康年に送った手紙からも確認することができる。例えば、

弟滬上分袖後、布帆安穩抵長崎埠。……意者貴曆元日抵滬上也。若不能、然則八日必抵滬也。……日曆一月廿四日。^⑤

と、上海で汪康年らと別れて日本に着いたばかりのことが書かれている。また古城の明治三十年版（東京經濟雜誌社）の『支那文學史』の冒頭に、「明治二十九年九月十一日」の日付けをもった井上哲次郎の序文がある。そこにも「頃ろ偶々上海より書を余に寄せて曰く、草稿正に成れり、今之れを印刷に付せんとす、請ふ爲めに序を作れと」と書いており、つまりこの序を書く以前に古城が上海に行つてい

たことを示している。このように、古城が最初に上海に行つたのは、明治三〇年十二月ではなく、二十九年の秋以前と考えられる。

古城貞吉は、『時務報』の職に就き、そしてやがて汪康年との關係から羅振玉らの『農學報』の翻譯も擔當することになった。古城は上海・日本を往復し、『時務報』・『農學報』の翻譯、書籍・新聞の購入のみならず、當時彼らの周邊の新學を志向する人々のために必要な日本の書籍・定期刊行物などの購入に勞を惜しまなかった。それは當時の人々の往來書簡からよく示されている。例えば、

代購各種書籍亦携至、若不能悉携、則應爲郵送至滬之計、（古城の汪康年宛の書簡、同上三三〇六頁）

聞古城帶到農學書甚多、乞示細目、想是農學會所置譯者、此盛業也。弟早知日本有『草木圖說』一書、考證植物極精。又日人曾譯立尼由司『植物大全』。此兩種、乞兄託古城先生函購勿遲誤、將來該價若干、照價奉繳、……正月十七日（葉瀚の汪康年宛書簡、同上二五八七頁）

同氏の次の書翰にはまた、

日本書承囑古城代買、感切感切。近又閱「日清戰爭實記」、後邊有各種地學書與物理書、又「地理千題」等篇目、價值開一清單、祈交古城先生去買、又東文法書易通否？請聞古城。（同上、二五八八頁）

と書かれ、つまり古城は當時の『時務報』の周圍における日本情報源の總領ともいえる立場にあったようである。彼が日本に一時歸國していた期間にも、翻譯の原稿を上海へ送り、代購した日本の書籍を郵送しつづけていた。

古城貞吉は『時務報』・『農學報』、後にまた『蒙學報』などの翻譯を擔當したのみならず、明治三十年には大阪毎日新聞社に入社し、一身に幾つかの職を帯びていた。そのために、次第に日本關係の内容を増やしていった『農學報』の翻譯需給に彼が應じ切れなないのは想像に難くない。それゆえ、羅振玉らは『農學報』の専任の翻譯者をほかに採さなければならなかった。

2 藤田豐八との出會い

はなはだ幸運なことに、ほどなく羅振玉は後に彼の生涯

において大きな意味をもつことになった人物と出會った。すなわち藤田豐八である。

藤田豐八の長い大陸遊歷時代は、上海から開始したのであった。藤田の清國渡航に關しては、かつて羅振玉が、「光緒丁酉（一八九七年）、予主學農社、聘君迓譯農書、君遂至上海」（『日本臺北大學教授文學博士藤田君墓表』、『羅雪堂先生全集』初編四）と述べ、また羅振玉・王國維が編集した『教育世界』に載った藤田豐八の肖像の後ろにも、「藤田學士、以丁酉夏應上海農會之聘、渡來中國、倡設東文學社」（『教育世界』第七十號、一九〇四年）と書かれている。これによると、恰も藤田豐八の上海行きは最初から羅振玉の招聘であつたかのように思われるかもしれない。

ところが、藤田の招聘者について、一八九七年四月號の『東洋哲學』（第四編第四號「雜報・狂癡一棒」）には、「藤田豐八君聘せられて清國に赴き、事に馬建忠の新聞に従ひ」という記事がある。また同年四月號の『東亞學會雜誌』（第一編第四號、彙報「藤田氏赴任清國」）にも、「今又文學士藤田豐八君は聘に應し清て（ママ）國に赴き馬建忠の新聞

に従事せんとす」の記述が見える。このように、藤田が中國へ渡った時期は一八九七年四・五月であることでほぼ一致しているが、招聘者については分岐点がある。さらに『對支回顧録』にある「藤田豊八君」列傳によれば、また「清國淮安の有志羅振玉の主宰せる上海農學報館の聘に應じ、上海に赴いて、雜誌『回報』に執筆した。之れ君が支那に足跡を印したる第一歩であつて、」と書いている。ここでは上海行きは羅振玉の聘によるものとしているが、雜誌『回報』に従事したとも書いている。『回報』は、馬建忠の新聞であろうか、はつきり分らないが、『東洋哲學』と『東亞學會雜誌』における記事は、當時の記録として信頼度が高いから、やはり藤田の渡航の最初の計畫は馬建忠の新聞に従事するためであつたと考えてよいだろう。

だが、最初計畫した行き先は馬建忠の新聞であつても、出發の前に何らかの關係で、時に同じ上海にいる羅振玉の招聘も引き受けたということも考えられる。なぜならば、一八九七年二月二十三日付け、羅振玉の汪康年あての書簡には、「東文翻譯已定藤田君」（『汪康年師友書札』三二五六

頁）ということも書かれており、その時藤田はまだ上海に着いていないはずだからである。そして羅振玉がどのような経緯で藤田を知ったかについては、「藤田豊八博士略傳」によれば、

時に羅振玉氏等上海の農學報館を主り、農學に關する書籍を漢譯せんとするも、その人なきに苦む。たまたま知友寧波の袁子壯君の紹介から、上海の海苔公司の農學士某君より、博士のことを仄聞し、遂に之を招聘して其の事に當たらしむることとした。……（此の事實は記者が羅氏を大連の墨緣山房に訪問した時の同氏の實話による）（『東方學』第六十三輯、昭和五十七年一月）

ということである。これはすなわち羅振玉と藤田豊八の、生涯に渡る深い縁の出發といえるであろうか。

三 東 文 學 社

一八九八年三月十日、羅振玉、蔣黼、汪康年など五人の出資によって、東文學社が上海で開學した。^⑤ 東文學社は中國最初の日本語學校であり、後に樊炳清や王國維・沈紘な

どの人材を生み出し、多くの翻譯業績を上げた教育出版機構である。東文學社の正式開學は上記の一八九八年三月であるが、設立の構想はすでに一八九七年十月前後にできあがっていたことは、『農學報』に掲載された「東文學社社章」の日付から分かる。^⑦

1 東文學社の設立と羅振玉の日本觀

今知られている東文學社に關する資料は決して多くはない。主に「東文學社社章」、羅振玉・王國維の書簡、羅振玉の自傳『集蓼編』といったところであろう。

まず、「東文學社社章」から東文學社の設立の趣旨を見てみよう。

第三章 主意 立此社之主意約三端左列之

- 一 因將來中東交涉之事必繁而通東文者甚少故
- 二 因譯書譯報動須遠聘故
- 三 因中東人士語言不能相通、將來遊歷交接種種不便故

東文學社の設立に關して、大川俊隆氏の論文「上海時代の羅振玉——『農學報』を中心として——」（注①を參照）

では、「東文學社設立の第一の目的」は、羅振玉が「自己直系の翻譯人員を確保する」ことだと指摘している。確かに上記の「因譯書譯報動須遠聘故」や、同第五章「學生」の、學費を支拂えない貧乏な學生に對し身元保證人がいれば學費の免除ができるが、卒業してから學社で在學と相當年數の翻譯をすることによって學費を返済してゆく條や、第六章の、學生達に數ヶ月勉強してから譯書の學習をさせ、學社がその譯書を出版して利益は學社の資金になる條、また羅振玉が後に「海寧王忠愨公傳」の中に述べることなどから、その目的を充分に確認できる。しかし上記「社章」の中の「因將來中東交涉之事必繁而通東文者甚少故」「因中東人士語言不能相通、將來遊歷交接種種不便故」の二點にも十分に注意を拂う必要がある。前者は日清戰爭以降急速に増えてきた日本語習熟者の社會的需用に應じて言っているであろうが、後者は専ら兩國間の國民の民間的交流を意味したものと考えてよいだろう。そして同「社章」の冒

頭にはまた次の文も書かれている。

日本立國在我東偏、有明以前畫竟而治、雖間通盟好、交涉未多、今海禁大開、殊方絕域、罔不通好、於是講求歐西語言文字者實繁有徒、誠務其急也、日本同處一洲、而研習其語言文字者願寥々焉、彼都人士蒞止中國、中國士夫往々不能與之通姓字、彼國書籍流傳中國、中國士夫往々不能通數行、不便孰甚、(蒙)等不揣固陋、創立學社以爲之倡、……

日本に目を向けるのは當時の風潮であつたが、その實質は日本にではなく、日本を通じてもつと速やかに西洋に追いつこうとするのが一般的な傾向であつた。例えば、『時務報』第三冊(光緒二十二年七月二十一日)の「本館辦事諸君名氏」に、「東文翻譯、日本東京古城貞吉」の項の下「日本近習西法・譯西書甚多、以東文譯華文較爲簡捷、今除譯報外、兼譯各種章程並書籍」と書かれているのは、その表れの一つであらう。しかし東文學社の「社章」には、それとやや異なる趣が映されている。西洋文化を學ぶの間に合わないから日本という近道を取ろうとするのではない

羅振玉・王國維と明治日本學界との出会い(錢)

く、寧ろ「講求歐西語言文字者」は多いが、「研習其(日本)語言文字者願寥々」であるため、兩國の「通好」、そして學者・學術の交流に障礙となつてゐることの改善を唱道しようとしたものである。ここから、當時の一般風潮と微妙に異なる態度が讀みとられる。

ところが、日本から日清戰爭という大きな傷を受けた直後にあつて、負けたから「敵」の日本に學び西洋に追いつこうというのならわかりやすいが、なぜ戰爭の直後に自ら「敵」と「通好」や「親善」を唱道するのか、不思議に思われるかもしれない。この問題を理解するために、まず「日本臺北大學教授文學博士藤田君墓表」と『集蓼編』の中の二段落を見てみよう。やや長いものではあるが、一應引用しておきたい。

予以西力東漸、非中日敦睦不克御務、願語文閭隔、意志不通、擬創東文學社以溝通之、君欣然贊許、自任教授、(日本臺北大學教授文學博士藤田君墓表)

予與(藤田豐八を指す)言中日本唇齒之邦、宜相親善、以禦西力之東漸、甲午之役、同室操戈、日本雖戰勝、

然實非幸事也、學士極契予言、謂謀兩國之親善、當自士夫始、於是日本學士之遊中土者、必爲介紹、然苦於語言不通、乃謀創立東文學社、以東文授諸科學、謂必語言文字不隔、意志始得相通、……學社乃立、繼是日本亦創同文會、會長近衛公（篤磨）、及副會長長岡子（護美）、均來訂交、日以同文同種相勸導、意至誠切、於是兩國朝野名人、交誼增進、（『集蓼編』十一頁）

ここにいう「唇齒之邦」「同文同種」「以禦西力之東漸」などは、決して羅振玉の個人的な、一方的な提言ではなく、當時の日本においても、いわゆる「日支同盟論」の典型的な論議といつてよいだろう。『下關條約』による遼東半島の割譲が三國の干渉で返還を餘儀なくされた結末に象徴されているように、日本は日清戦争後西歐列強の仲間に入るのに一歩前進したと同時に、列強との競争も表面化し、以前より一層厳しい國際環境に置かれることになった。そこで西洋に仲間入りしたい願望と競争相手として免れない壓迫感とが絡み合った、近代日本の精神構造は、やがて日本對西洋ではなく、東洋對西洋という陣立てによって西洋に

對抗していこうという發想を生み出す。所謂「唇齒之邦」「同文同種」の日支同盟論は、まずこうした「東洋」「大東亞」の思考背景の中に位置すべきものであろう。ここで羅振玉に言及された「東亞同文會」は、正に日本社會に於けるこのような主張の代表者と言え、その會長の近衛篤磨は後に國民同盟會を作り、清國保全論を唱道していた人物としてもよく知られている。日中兩國の同盟論の出發點がどれほど同質であるかについては、簡単に斷定できないものの、少なくとも「以禦西力之東漸」、つまり「東洋對西洋」といった主張は、一時期兩國の多くの人々の共鳴するところであつたに違いない。まさにこうした共感によって羅振玉が、「學社乃立、繼是日本亦創同文會」と自ら東文學社と東亞同文會との相關性を強調したのである。東文學社の設立を考える時、その提唱する日中兩國の「敦睦」と「親善」は、このような時代の特種な連帶意識と思考背景を有したことも忘れてはならない。

また「謂必語言文字不隔、意志始得相通」という所に表されているように、これは漢文「筆談」といった舊來の中

國優位の「交流」意識ではなく、また日本語を單に西洋文化と交流するための媒介とする時流とも違い、兩國の言語上の障害を除くことによって、はじめて「意志の相通」、つまり眞の精神的な交流が望めるというのである。それは日本の書籍と學問を西歐文化の附屬品に過ぎないと見なしているのとは違い、日本の學術そのものに價值を認めることになる。このような對日文化觀は、日中文化交流史の中で一點の異彩を放ったと言っても過言ではない。東文學社の設立は、日中兩國の學者が互いに交流を求めあつた結果にはかならないのである。

羅振玉のこうした姿勢の徹底化ともいえるだろうが、東文學社の持つもう一つの獨自な性格が注目値する。その頃、上海をはじめ各地にいろいろな西洋式の學校が作られ、西洋人と日本人の教師がたくさん招聘されていた。そうした學校では、ふつう歐米或いは日本の教科書を大ざっぱに中國語に譯したものをテキストとして、中國語ができない歐米や日本人教師が通譯と一緒に授業をする、というかたちとられていたところが多かった。いわゆる「譯授」と

言われるものである。しかしながら、東文學社では主に日本の小學校、中學校の教科書を用い、まず日本語を學習し、そして二年目からは通譯を使わず直接日本語で英語、數學、物理などいろいろな科目の授業をしていた^⑧。これは當時のほかの學校とは異なる獨自の教育方法である。この方針は、羅振玉が後に張之洞の依頼に應じて湖北農務局の總理兼農務學堂の總督に就いた時にも實行しようとしたことから、彼の持論であつたことがわかる。そのことについて、『集蓼編』の中に次のように述べられている。

因詢教員（筆者案：日本人）、以學生既三年、何仍不能直接聽誦、答以提調嫌第一年課表東語太多、謂既有譯員、不必重東語、……乃謁文襄（張之洞を指す）陳二事、一請裁不職譯員、暫覓替人、以後廢除、令學生直接聽講、……（十三頁）

この學堂は、學生が不眞面目、教員が教育に熱心ではなく、學風は腐敗し、閉校の寸前という状態に陥つたために、羅振玉を呼んで再建させようとしたのである。羅振玉の教學再建策はまず日本語教育の重視と日本語で「直接聽講」

という東文學社の方針を取っていたのである。

この畫期的な教育方針は、いったいどのようにして考えつかれたものであろうか。東文學社開設の一年あとのことであるが、農務學堂の教育に關して羅振玉と日本人の農學者（美代清彦・吉田某・峯村喜藏）らとが話し合つたことが自傳の中に觸れられている。その中で日本人教師たちは農務學堂の授業を直接日本語で教えるべきだという意見を述べる。それに對して羅振玉は「其言頗合理」と記しているが、すでに東文學社においては日本語による教育を行つていた羅振玉は我が意を得たりと思つたことだろう。資料といえるものはこれしかないのだが、臆斷すれば、東文學社設立の際にもやはり日本人教師からの提言を入れて、日本語直接教育に踏み切つたのではなかつただろうか。そしてそれを提起した日本人は、藤田豊八ではなかつたか。

どのような経緯であつたにせよ、東文學社のこの方針は、羅振玉の開明性を示すものである。まず日本語を學習し、日本語を通して各科目を學ぶという、一見迂遠な方法、ここにも上に述べたような、東文學社が單に西洋攝取の手段

として日本を利用するだけではないという基本的な態度の實踐を見ることができよう。そしてこれはのちに述べるように、豫期しない大きな果實を生むことにもなつたのである。

2 東文學社時代の藤田豊八

上海に着いた藤田豊八の譯著は、一八九七年七月の『農學報』第六冊に初めて掲載されたのち、彼が中國を離れるまで『農學報』に止まらず、いろいろな経緯で信じられないほど膨大な數に上つた。（それについては、付録のリストを參照）もちろん藤田の志は農書翻譯のみにとどまるものでなく、當時の中國を啓蒙するための教育と日中兩國學術文化界の交流に對しても、非常な熱意を示していた。上にも觸れたように、彼のこのような思いはまもなく羅振玉の共鳴を得て、東文學社の設立から、次第に各方面の事業に向かつて發展していくことになる。

東文學社開設の際、羅振玉が言うように、藤田は自ら教授、教務を一身に引き受けて「教習」に任じられた。間も

なく、藤田は帝國大學の同輩の田岡佐代治を上海に呼んで、自らその中心となり、更に上海日本副領事の諸井六郎などの「義務教員」（東文學社の趣旨に賛同し、無報酬で講義を擔當した教員）とともに、東文學社の教育を推進していった。當時の中國の書院・學堂にはまだ日本語を教えるところがないため、東文學社は入學者が多く、盛況を呈した。それと同時に、後に羅振玉が、「每君授課暇、輒相與論學、恆至午夜、如是者十有六年」（日本臺北大學教授文學博士藤田君墓表）と語ったように、藤田と羅振玉との交誼も日を追って深まっていた。

先に田岡佐代治（一八七〇—一九二二）という名前に觸れたが、ここですこし説明を加えたい。田岡佐代治、字嶺雲、高知縣土佐郡に生まれ、明治の文壇・批評界で大活躍した批評家で中國文學研究者である。明治二十四年九月、帝國大學文科大學漢學科選科に入學し、そこで同期或いはその前後の中野逍遙、藤岡東圃、藤井紫影、藤田劍峯、笹川臨風など多くの親友を得た。選科時代から雜誌『亞細亞』、『史海』、『日本人』などに投稿して文壇に新銳の批評家と

羅振玉・王國維と明治日本學界との出会い（錢）

して注目された。明治二十七年大學卒業、同年の十一月、小柳司氣太が編集兼發行者となり、藤田豐八・笹川種郎・田岡佐代治・藤田精一らが同人となって、月刊誌『東亞說林』を發行し、東洋の學術・思想を大いに發揚すべきだと主張し、漢學研究を振興する必要を説いていた。更に明治二十八年、藤田豐八、藤田精一・本城佐吉などと互いに糾合し、東亞學院という學校を設立し、講義録も發行した。またそれと別に明治二十八年二月より『青年文』の主筆となった。明治三十二年五月、上海に渡り、羅振玉らの東文學社に聘せられて教師を務めた。ちょうどこの年の三月、嶺雲の最初の文集『嶺雲搖曳』（新聲社）が出版され、出版界を驚かせたほど賣れ、同年十一月、『第二嶺雲搖曳』も相繼いで刊行された。その時の東文學社の學生であつた王國維は、正に田岡佐代治の上記の著書からカントとシヨペンハウアーの哲學を知り、興味を引き起こされたのである。王國維はかつて「自序」（『教育世界』一四八號、一九〇七年；『靜庵文集續編』）の中で、「余一日見田岡君之文集中有引汗德・叔本華之哲學者、心甚喜之、顧文字睽隔、自以爲

終身無讀二氏之書之日矣」と述べていた。同じカント・シヨペンハウアーの影響を受けた王と田岡二人の美學・文學觀の展開と關係について、須川照一氏「王國維と田岡嶺雲」〔東方〕第四十五、四十六號、一九八四年）、竹村則行氏「王國維の境界說と田岡嶺雲の境界說」〔中國文學論集〕第十五號、一九八六年十二月）、岸陽子氏「也談王國維和田岡嶺雲——以『人間詞話』爲中心」〔王國維學術研究論集〕第三輯、華東師範大學出版社、一九九〇年）などの研究がある。更に追究する必要があるが、それはまた大きな問題であるため、別の機會をもうけて詳しく考察したいと思う。

東文學社が開設された二年目から、日本語のほかに、英語・數學・化學・物理も兼ねて教えるようになった。藤田は數學まで教えるほどの八面六臂の大活躍で、教育に没頭していた。このことについて、當時東文學社の學生であつた王國維が次のように述べている。

其時擔任數學者、即藤田君、君以文學者而授數學、亦未嘗不自笑也、顧君勤於教授、其時所用藤澤博士之算數・代數兩教科書、問題始以萬計、同學三四人者、無

一問題不解、君亦無一不校閱也。（自序、同上）

戊戌變法後、學生達の三分の一が退學し、學校の運營費も底をついてしまった。その時、藤田は東文學社からしばらくの間、一錢の給料ももらわなかったにも関わらず、教育への熱意は少しも減ずることがなかった。そのことは王國維・羅振玉らに深い感動を與えた。王國維は當時汪康年に送った手紙の中で、次のように敬意を表している。

藤師學術湛深、其孜孜誨人不倦之風尤不易及。開歲以後未交一文之脩、而每日上講堂至五點鐘、（彼中學堂教習至多不過三點鐘）其爲中國不爲一己之心、固學生所共知、而亦公之所諒也、（一八九九年四月十四日；『王國維全集・書信』、中華書局、一九八四年）

藤田豐八のこのような中國の教育事業に全力を盡くす精神は、當時において學生にも大いに感銘を與えていたに違いないであろう。それゆえ、戊戌政變後、東文學社の經營が危機に面した時、羅振玉は歸省先の淮安から度々上海の汪康年に手紙を送り、できるだけ藤田を留め、東文學社を續けさせることを切に頼んでいた。彼は汪氏に宛てた書簡

にこのように書いています。

藤公熱心爲支那、不僅區區一學社、尙冀先生有以維繫之、不可有負遠人厚誼。況明歲僅製造局歲脩^⑤、學社並無脩金、其厚誼尤非今人所及也、戊十二月初八收（一九一九年一月十九日、『汪康年師友書札』三二五九頁）

藤田のこの「厚誼」に答え、羅振玉も「社中一切、應由藤公主持」、「緣藤公一片熱心、不宜加以限制也」、「（汪康年宛書簡）と深く藤田を信賴し、學社の教育權をほぼすべて彼に任せることにした。のちに羅振玉は南洋公學・江蘇師範學堂・廣東教育顧問・北京の學部など、どこに轉じても必ず藤田をトップとして推薦し、前後十五年にわたって事業をともしたのだった。

昭和四年、藤田豐八が世を去った際に、羅振玉は長い墓表を書いて、藤田との長年に亘る友情を振り返っている。

「予己未返國、兩京神坂諸耆舊置酒爲別、君遺書言、公歸不能挽、何忍面決、……然由是與君竟永訣矣、」と、自分が京都から去る時に會うことができず、そのまま永訣してしまったことを心から悼んでいる。

羅振玉・王國維と明治日本學界との出会い（錢）

上海時代の藤田豐八は、小さな禮節に拘泥しない人だったようで、酒が大好きな「非常に豪傑風な、磊落とした先生」（「先學を語る——藤田豐八博士——」『東方學』第六十三輯、一六三頁）であつたと見える。上海での自由磊落な時代のことについて、後にこのようにも傳えられている。

そのころは上海には、福岡で誕生したところの玄洋社の壯士達が一杯居つたらしい。それを皆自分の家に連れてきて、多い時には十四人ほどいたとのことでした。食客が。そのころはすでに羅振玉と行を共にしておつたんですが、中國人は、食客が多いほど偉いと思うのでありますから、羅振玉も、それを厭がりもせず、それに適したような職を一生懸命探して職に就けたらしいです。（同上二八二頁）

ここから藤田豐八の豪傑風の個性と、それを理解する羅振玉の愛情がよく現れている。付言すれば、その時藤田豐八は『農學報』館に下宿していた時期かもしれない。また、逆に羅振玉に對しても、藤田豐八は、たまに氣が向かれた時に、羅振玉の印を大事そうに取

り出して使つていられたように記憶しております。そうして羅振玉氏を褒めて一度親交を結んだ相手は決して棄てることのない立派な人物だと言つておられました。(同上 一八〇頁)

と、互いに尊敬しあつていたのである。

羅振玉が早期に行つていた『農學報』・『東文學社』、後年の『教育世界』を含めた教育近代化の諸事業、その全體にわたつて藤田は多くの貴重な提言を與えたのみならず、具體的な運営に關しても勞を惜しむことなく奔走した。そうした事業面における協力にとどまらず、『集蓼編』の中で「於是日本學士之遊中土者、必爲介紹」と述べたように、藤田の關係によつて一八九九年、はじめて清國に遊んだ内藤湖南、^⑩一九〇一年、中國留學中の狩野直喜、一九一〇年、敦煌文書を調査するために渡清した京都大學諸教授など、日本の學術界の最先端を代表する帝國大學グループと出會い、京都時代を経て、やがて日本學術界と生涯にわたる深い縁を結ぶことになった。これはもとより藤田豐八の功績

に歸されるものであるが、また羅振玉の上述べたような、西洋の手段として日本を見るのではなく、日本そのものの價値を早くから認めた日本觀とも、決して無關係ではないだろう。羅振玉と藤田豐八との出會いの意味について、江上波夫氏が的確に總括している。「藤田・羅兩者の邂逅・協力ははからずも東洋學史上重要な事件——中國の新國學と日本の新東洋學の握手を導き出すことになった」(「藤田豐八」『東洋學の系譜』第二集、大修館書店、一九九四年)。

しかし、東文學社時代の藤田豐八は、その周邊の中國の士大夫たちとの間に全く軋轢が生じなかつたわけでもないようである。例えば、一八九九年の春頃、東文學社の設立者の一人である汪康年との間に何らかの問題が生じたよう^⑪で、藤田豐八が一通の手紙を汪氏のもとへ送つたことがある。文面からは發端となつた事件がどんなものであつたのか分らないが、東文學社の學生をめぐる行き違ひがあつたらしい。王國維も汪康年に對して、藤田を慰留すべく仲裁に入つて^⑫いる。先に述べたような豪傑風の人士であつた藤田には、「其酒後沈湎、固不無小過」と王國維に辯明

してもらわなくてはならないような面もあった。この一事からも、藤田がそつなく無難に世渡りする人物ではなかったこと、中國人に向かつて言いたいことは言うといった關係をもっていたことがうかがわれよう。

このように、東文學社の設立は、もちろん羅振玉の新聞雜誌で翻譯を擔當するいわば直系の翻譯人員を育成するためという目的もあったが、日清戰爭の後に日中の交渉が増大する中で、羅振玉がただ時流を追って行き当たりばつたりに日本の書物を譯したのではなく、獨自の見識と誠意をもって日中兩國の文化交流を深めていきたいという願いも、その重要な目的ではなかっただろうか。これは當時の「日本ブーム」の中にあつて、東文學社のもつた一つの個性、或いは特色とも言えよう。

一方では、羅振玉のこのような對日觀は、やはり同時代の中國においては必ずしも理解されていたとは言えない。例えば、「實業救國」を唱道する清末名士、務農會の會員でもある張謇の日記には、次のような一節が見える。

羅振玉・王國維と明治日本學界との出会い（錢）

胡道言曰：「中國他事不如人、何致讀書亦向人求法、此張季直過信羅叔韞、叔韞過信東人之過也、（張孝若『南通張季直先生傳記』、中華書局、民國十九年）

また、後に北京の農科大學の任にあつた時も、日本東京大學古典講習科出身の林泰輔と甲骨文字について學術上の意見交換をしたために、章炳麟の日本漢學界の碩學宿儒を罵倒する、かのよく知られている公開信で、次のように厳しい非難を浴びている。

足下學術雖未周挾、自視過於林泰輔輩固當絕遠、身在大學、爲四方表儀、不務求山谷含章之士、與之商略、而意與九能馳驟、已稍負職、今復妄自鄙薄、以下海外腐生、令四方承學者不識短長、以爲道藝廢滅、學在四夷、……今以故國之典、甚精之術、不自校練、而取東鄙擬似之言、斯學術之大憾、國聞之大裨、（『與羅振玉書』『章氏叢書』太炎文錄初編卷二、二十九頁）

「過信東人」というのは、確かに羅振玉の生涯にしばしば見られる一つの特徴ではある。そこでいう「信」は、彼

の偏見なく明治日本の活潑な學術から感化を受け、それを積極的に吸収して生かそうとする契機になった一方で、その「過」は、やがて晩年に關東軍、偽滿州國に追隨するに至ったこととも繋がっているだろうか。

3 東文學社時代の王國維と藤田豐八

王國維は、かつて三十歳に際して書いた自序に、「甲午之役、始知世尙有所謂新學者、家貧不能以資供遊學、居恆怏々」（自序）と述べている。つまり王國維も、羅振玉と同じように日清戰爭後から外の世界へ目を向け、新學に憧れるようになったのである。その時の父の王乃譽の日記（上海圖書館藏、未出版）によれば、「見靜（王國維を指す）案有『盛世危言』一部、觀之、爲香山鄭陶齋所著、憂外人之侮、改用制度、慨乎言之」（光緒二十二年正月初六日）、「以其性訥鈍、好談時務、嗜古籍而不喜於帖括、……以期通達中西要務以自立」（同年七月初二日）、「靜兒携借到『時務報』四十五、六兩冊、燒燭觀之、其謂中朝不能驟更新法、雜亂無章、恐遲延不達、則世界早變」（光緒二十三年十一月

十四日）など、多くの記述が見られる。要するに、王國維は十代の終わり頃から、父子共に時事に關心を示し、變法維新運動に共感し、また新學を志向しようとしたことが分かる。

一八九七年、羅振玉らが上海で『農學報』を作ったとき、王國維はちょうど二十一歳で、羅振玉と同じように二度目の鄉試に合格できず、郷里で家庭教師をして生計を立てていた。その時上海の時務報で書記をしていた友人の許家惺が故郷に歸ることになり、代わりに王國維を時務報に推薦した^⑬。そこで一八九八年二月、王國維は二十二歳で上海に行き、時務報で書記の仕事始めた。王國維の上海への出發は、羅振玉が「公時方冠、思有以自試、且爲菽水謀、乃被至滬江」（海寧王忠愨公傳）といったように、國のために何らかの貢獻をしたいという志を抱いていた一方、生計を立てる職を探すためでもあった。

上海に着いた王國維は、國を憂えて維新改良に心を寄せ、新學に憧れていたことを、許家惺に宛てた次の手紙のなかに端的に表している。

常謂此刻欲望在上者變法、萬萬不能、惟有百姓竭力做去、做得到一分就算一分、……蔣伯斧先生說、西人已與日本立約、二年後日本不准再譯西書、然日本通西文者多、不譯西書也無妨、此事恐未必確、若禁中國譯西書、則生命已絕、將萬世爲奴矣、（一八九八年三月一日、
『王國維全集・書信』三頁）

「欲望在上者變法、萬萬不能、惟有百姓竭力做去」とは、つまり朝廷の體制側に對してもとより希望を抱いていなかったことである。「若禁中國譯西書、則生命已絕、將萬世爲奴矣」というのは、ただ中國の從來の傳統秩序體系に西洋の實用的な「新學」を取り入れて目の前の危機を免れさせればよいのではなく、西洋書の翻譯を中國の命と考え、それを未來に於ける唯一の希望とみる視點は、羅振玉らの「上以酬朝廷飢渴之意、下以盡草野芹暴之枕」（「務農會略章」）に表れた趣とは、やはり異質であらう。王國維のこのような維新・新學に對する姿勢は、以後の彼と羅振玉の西洋受容の大きな分歧點を象徴するといえるかもしれない。しかし時務報館での學問と全く關係のない書記の仕事に

は興味ももてず、しかも給料は非常に低くて生活も苦しいものであった。王國維が時務報館をやめようかと悩んでいたちようどその時、東文學社が創立された。そこで王國維は毎日三時間の日本語學習を時務報館から許可され、そして時務報館からの借金によって學費を納め、入學することができた。開設當初の東文學社は、教師は藤田豐八で、彼が日本の尋常小學校教科書を使って専ら日本語を教えていたようである（王國維の許家惺宛書簡、一八九八年六月十八日、同上）。しかし、東文學社に入って一年目の前期には、王國維の日本語の勉強はかなり難航し、月末の試験で合格もできなかった（羅繼祖『永豐鄉人行年錄（羅振玉年譜）』十八頁による）。そのことについては、彼の許家惺宛の手紙から一斑を窺うことができる。例えば、

讀東文後頗覺不易、苦無記性、不能從事他學、又不能半途而廢、殊悶、（一八九八年三月二十四日、同上）

現在弟學東文、勢難間斷、已成騎虎之勢、……現在除讀東文三點鐘外、幾無暇晷、於學問（及又須代翻譯作表、及五十六、七等期論說中之表亦弟所作）絲毫無益、而所入

不及一寫字人、又奚爲哉、（一八九八年四月十三日、同上）

ここに見られるように、時務報館の仕事が忙しく、日本語を勉強する暇がなく、進歩できず大變悩んでいた。一方、その時は日本語勉強の情熱も足りなかったようで、暇があっても勉強しなかったことも自ら認めている。それもまた許家惺に送った手紙に、「東文較西文誠易、但苦無暇讀、因出館後仍須溫習、即有暇亦不肯讀、是以不能精進」（一八九八年六月十八日、同上）と述べられている。

最初の時、王國維が懂れていた「新學」とは西洋の學術であり、日本語の勉強はやはり當時の多くの人々の考えと同じように西洋に接近するための手段と見ていたようである。例えば、許家惺の弟の入學について相談に乗った時、

「令弟年甚輕、尚可學西文、東文似不甚合算。……同一出束修、雖較大些、固較東文較勝」と述べており、この時點における王國維は新學に關して、明らかに西洋の學問を優位に見ていたのである。だが、當時の王國維は、經濟面の理由で直接に西洋の學問を學ぶ餘裕が全くなく、彼にとつ

て生計の壓力は決して軽いものではなかった。例えば、後に「國學大師」「學貫中西」と呼ばれることになった王國維が、時務報時代に直面した急務は、まずいかにして早く新聞社の雜務を離れてもっと専門的な職に就くかであった。その時彼が望んでいた職は、すなわち日本の新聞の翻譯に他ならなかった。そのことについて、例えば、彼は次のようにいう。

唯弟事穰先生雖有意令弟爲日報譯東文、唯繙譯事概歸會敬詒主持、事成否未可知、又日報恐非長局、（現款甚支絀）如果成、修亦不過照前、唯事較歸一耳、（一八九八年六月三十日、同上）

穰先生爲國維學問故、俾譯東文、至感至感。（一八九八年七月二十五日）

以上のように、王國維は日本新聞の翻譯職を切に望んでいたことから、その時期における彼の日本語の學習は、やはり學問のためと、現實的な生計のためという二本立ての目的があったと考えられる。王國維のように科擧に成功しなかった貧しい讀書人達にとって、専門職というと、各地

で遂行されている「新政」によって得るしかなかったであろう。その志向する新學も、「來日大難、非専門之學恐不能糊口」（一八九八年七月五日、許宛の書簡）というように、生計の危機感に裏付けられて展開していくことになる。これも清末の中下層知識人の讀書生活と學問選擇を考察するときに特に注意を拂うべき點である。彼らには理念のほかには、生活のためにも「新學」「新政」に接近する「必要性」があったのである。青年時代の王國維はこのような社會環境の中に置かれていたことを、彼の父の王乃譽の日記の一節が端的に表している。

靜（王國維）此行（日本留學を指す）、能於明年變法、鄂督舉薦人才、征召歸來、或有事做、吾願如此、（王乃譽日記）一九〇〇年十二月九日）

東文學社に入つて一年目の後期に、戊戌政變が起つた。この「政變」に對して、王國維は、「此次變故、實與日本幕府之殺藩士相似、但中國士氣蘊敝、不敢望尊攘也」（一八九八年九月二十五日、許宛の書簡）と、康・梁らの維新運動を日本の明治維新に喩えていた。また「聞吾邑士人論時

事者蔽罪亡人不遺餘力、實堪氣殺。危亡在旦夕、尙不知病、並仇視醫者、欲不死得乎」（一八九八年九月二十六日、同上）と、維新志士に同情を示したことは明らかである。この點において、當時の羅振玉とは微妙に違っている。

王國維が、東文學社の時代に羅振玉と出會い、その才能を認められ拔擢されていったことが、彼の學者としての生涯に重大な意味をもつことになったについては、これまでよく言及されてきた。しかしながら、東文學社を通して、青年時代の王國維に日本語・英語、そして數學、化學、物理など基礎教養の科目を教え、更に哲學・心理學・教育學・日本の新しい東洋學など多くの讀書に影響を與えた、彼の新學啓蒙の師——藤田豐八の存在については、とりわけ中國の學界では、從來あまり顧みられなかった。例えば、これまでのいくつかの王國維年譜のどれにおいても、藤田豐八に關しては二三の事實が簡単に觸れられているに過ぎない。また『王國維與近代東西方學人』（陳鴻祥氏著、天津古籍出版社、一九九〇年）という、専ら王國維の學術生涯における内外の影響關係を考察した本でも、やはり藤田豐

八・田岡佐代治に關しては僅かな事實記述しか見られず、學術上の實質的な關わりについて、まったく検討されていない。しかし、王國維の青年期に書かれた『靜庵文集』及び『續編』、すなわち『教育世界』雜誌に發表された彼の三十五歳までの論文の多くは明治期日本の學術成果と深い關係をもつことから、藤田・田岡との關わりを近代日中學術交流の視點から改めて考察を加える必要があると思われる。

王國維は東文學社に入つて、わずかな間に羅振玉だけでなく、「教習」の藤田豐八からも注目されるようになった。上に觸れた『時務報』の汪康年が王國維の日本語翻譯職の依頼を引き受けたのは、實は藤田豐八の力が預かつていた。その経緯は王國維の次の書簡から窺えるだろう。

弟學東文、因事冗所進甚淺、蒙教習藤田君垂愛、屢向穰先生說弟事多、于學問非所宜、囑以旬報或日報譯東報事畧弟、庶得一意學習。(二八九八年六月三十日、許家惺宛)

また、王乃譽の同年五月(舊曆)の日記にも「藤師薦渠

翻東報」と記している。そのことについて、「先學を語る——藤田豐八博士——」の中で、曾我部靜雄氏(藤田の甥)が次のようなエピソードを語っている。

王國維は、授業の時の質問や、話をした時には非常に秀才のように見えたが、試験すると、出来なかつたらしい。それでどうもおかしいと思つて彼に聞いたら、彼は印刷の職工をやつていて、勉強する暇がないということが分かつたので、彼を引き取つて、手元に置いて勉強させたんだそうです。

この話は、ほぼ上記の王國維の書簡と王乃譽の日記と一致する。つまり王國維の勉強のために、藤田は屢々東文學社の設立者の一人でもある汪康年のところに駆けつけていたのである。そして戊戌政變の後、時務報館(當時に『昌言報』と名を改めた)の閉鎖によつて職を失つた王國維は、また羅振玉と藤田豐八の世話で、東文學社の庶務の仕事を担当し、その代わりに學費が免除され、勉強を續けることが出来たのである(王國維「自序」、王乃譽日記による)。藤田豐八が王國維に對して賞賛していたことは、當時ちよう

ど中國留學中で上海で藤田と會つた、彼の大學時代の同窓の狩野直喜の回憶談話からもその一斑が分かる。

その藤田博士から、自分の現に教へて居る生徒の中に某生なる者があり、頭腦が極めて明晰で、日本文を善く讀み、英語をも巧にし、且つ西洋哲學研究に興味を有しその前途大いに囑望するに足りるものがあると謂うことを聞いた。……藤田博士は口を極めてその某生を推賞し、いろいろ推賞話をせられたのであつたが、私はつい面會することもしなかつた。この某生が即ち後の王靜安君であつたのである。〔王靜安君を憶ふ〕

『藝文』第十八年第八號、昭和二年)

もし羅振玉が王國維の學問的才能を認めて拔擢したことが重大な意味をもつならば、直接の先生である藤田豐八のこのような「伯樂」の見識と育成も同様に高く評價すべきであるのみならず、彼の影響が青年王國維の學問形成に及ぼした様々な力も丹念に考察しなければならぬであらう。「東文學社社章」の中に書いてある通り、學社が開學して數ヶ月後、王國維の同窓に當たる沈紘・朱錫梁・樊炳清

羅振玉・王國維と明治日本學界との出会い(錢)

などの譯著は次々と『農學報』或いは東文學社によつて掲載・出版されるようになった。だが王國維の譯著は彼らよりずっと遅く出た。今の段階で王國維の最初の作と判斷できる文は、すなわち一八九九年の春、羅振玉の代筆として書いた(『永豐鄉人行年錄(羅振玉年譜)』十九頁による)、東文學社から翻刻出版された那珂通世の『支那通史』の序文である。その序文の冒頭に、「支那通史者、日本那珂通世之所作也、都若干卷、取精於諸史而復縱橫上下於二千餘年之書、以究吾國政治、風俗、學術之流遷、簡而賅、質而雅、……」(『文學博士那珂通世君傳』『那珂通世遺書』、大日本圖書株式會社、大正四年)というのをはじめとして、更に

此非所謂良史者歟、所謂持今世之識以讀古書者歟、以校吾土之作者、吾未見其比也、豈今人之果勝於古人哉、抑時使然歟、

と、「持今世之識以讀古書」、いいかえれば、今までにない新しい見識・方法・視點によつて古代を研究するという開拓性に對して、非常に高く評價していた。そして最後に自國學界に對して反省の氣持を込めて、この書の重印(原

本はもとより漢文で書かれたから、翻譯ではなく全くの重印である)の意義を述べた。

嗚呼、以吾國之史、吾人不能作、而他人作之、是可恥也。不恥不能作、而恥讀他人所作之書、其爲可恥、孰過是也、故序而重刊之、世之君子以覽觀焉。

これは、清末において、學界の保守的な氣風への對抗意識を持ち、新しい古典研究を呼び起こした第一聲ではなからうか。同年、また藤田の指令のもとで桑原隲藏の『東洋史要』の序を書くことになった。この序には、まず科學的歷史研究を提起している、

自近世歷史爲一科學、故事實之間、不可無系統、抑無論何學、苟無系統之智識者、不可謂之科學、中國之所謂歷史、殆無有系統者、不過集合社會中散見之事實、單可稱史料而已、不得云歷史、
また「歷史團體」としての「東洋史」の概念を説明している、

抑古來西洋各國、自爲一歷史團體、以爲今日西洋之文化、我東洋諸國、亦自爲一歷史團體、以爲東方數千年

來固有之文化、至二者相受相拒、有密接之關係、不過最近世事耳、故欲爲完全之世界史、今日尙不能、於是大別世界史爲東洋史・西洋史之二者、

最後に、歷史研究の目的を

其稱東洋史西洋史者、必自國史雜沓之事實中、取其影響及他國之事變、以說明現時之歷史團體者也、……余尤願讀是書者、就歷史上諸般之關係、以解釋東方諸國現時之社會狀態、使毋失爲科學之研究、乃可貴耳、
といっている。近年の王國維研究では、この序を彼の新しい史學觀を表した最初のものとしてかなり重要視している。例えば、

此系今所見王氏著名的第一篇闡發其史學觀點的序文。其主張歷史應「爲一科學」、而非史料之堆積、與梁啓超倡「新史學」、殆多不謀而合之處。(陳鴻祥「王國維年譜」、齊魯書社、一九九一年)

また同氏はほかの著作においても、更に、

當他尙就讀「東文學社」時、……寫了充滿梁氏所謂「新史學」精神的序言、其中提出了建立歷史科學的要

求、……將王氏的這些話與梁氏相比、較其『新史學』

早三年、較其『歷史研究法』早二十三年。（陳鴻祥）王

國維與近代東西方學人」、三七四頁）

といっている。この序が梁啓超の「新史學」の精神と一致するところがあるのは認めてよいのであるが、それを王國維獨自の考えであると強調しすぎるのはどうか。というのは、序の冒頭に、「吾師藤田學士、乃論述此書之大旨、而命國維書其端曰」とあるように、これは藤田がこの書の主旨を述べ、それによつて王國維が書いたものなのである。

藤田豐八もこれより二年前、中等教科『東洋史』二卷と附圖二卷（文學社、明治廿九年七月）を編纂しており、その卷一の「凡例」のところには、「必ずや、國民と國民との關係を觀、一偃一起、以て現時の狀態を呈せし所以を繹ねざる可らず。」と述べ、また「總論」の冒頭に、「史上之に關聯せる諸國民を併せて、一團體となし、その團體の史を科學的に敘述するものなり。……たた東洋史に屬する史的團體は、時によりて伸縮ありと雖も、……」といった觀點と概念の表述が隨所に見える。そのみならず、次の章でも

羅振玉・王國維と明治日本學界との出会い（錢）

つと詳しく觸れていくことになるが、歴史の「科學之研究」や一つの「歷史團體」とした「東洋史」觀念の定着などは、正に藤田豐八達が活躍した同時代の日本學術の最新の結實にはかならない。そこからわかるように、この序は藤田の意圖に基づいて王國維が執筆したもの、或いは藤田の史觀を受容した上で王國維が書いたものと見るべきであろう。もし學術史の角度からいうならば、これは王國維というよりも藤田豐八の「歷史觀點」、或いは王國維の「藤田の影響を受けた歷史觀點」といったほうが正確だと思われる。

以上の主旨は、さらに翌年（一九〇〇年）に書いた「歐羅巴通史序」の中にも見られる。まず「凡學問之事、其可稱科學以上者、必不可無系統、系統者何、立一系以分類、」と、科學的系統性の樹立を學問研究の前提とすることを述べ、そして文化の史的な相互關係の視點から、歴史を「西洋史」と「東洋史」に大別し、「不問人種・宗教・洲域之異同、但取歷史上之關係、兼容並包、聯爲一體、是以印度與歐人同祖、仍爲東洋史之國民、……波斯以西諸國、若巴

比倫・若西里亞・若希伯來・若阿剌伯、雖國於亞洲、然其實關係於東洋史者絕少、從歷史上觀之、蓋純然西洋史上之民族也、」と、議論を展開していく。これは、そのままこの書の原著である箕作元八・峰岸米造の『西洋史綱』の持論である。またさらに元をたどれば、王國維が序の中で「蓋模德人蘭克 Ranke 氏之作」と指摘しているように、Ranke の觀點に行き着く。よく知られているように、Ranke は日本の近代史學研究史に多大の影響を與えていた。そして王國維は當時日本の史學界の新動向をすばやく把握し、吸収することになった。

上の三つの序は、王國維が東文學社で受けた新學の教養の中で、同時代の日本の先端學術とのはじめての出会いであり、ひいては學術の近代形成における清末の中國と明治日本との眞の出会いの開始ともいえるかもしれない。こうしたことの一切に橋渡しをしたのは、正に藤田豊八にほかならない。そしてそれは王國維らの翻譯紹介、羅振玉らの出版によって清末の中國に重要な影響を與えた。東文學社のこのような翻譯書が、當時かなり賣れていたこともその

事實を裏付けている。かつて羅振玉は『集蓼編』の中で、社中所授歷史・地理・理化各教科、由王・樊諸君譯成國文、復由豫措資付印、銷行甚暢、社用賴以不匱、

(十一頁)

と述べていたが、その「各教科」の内容は一體どのようなものであるかはよく知られていなかった。ところが、次に挙げる東文學社が「知識產權」の保護として「江南分巡蘇松太兵備道」からもらった出版專賣批示によって、「支那通史」などのようなものも當初その「各教科」の教科書に當てられていたこと、それが東文學社の翻譯出版によって各學校の教科書としての影響力を廣めていたことが分かる。

擬譯印各書爲各學堂教科之用、茲先印行『支那通史』

一部、以外已譯未印及未譯成之書、尙有數十種、並擬陸續付梓、惟坊間書賈習氣、見書銷路稍暢、往往冒名翻印射利、(前掲『東洋史要』頭頁)

それが好評であつたことは、「又聞日本人著有『支那通史』、甚好、祈代覓購一部。」(鄭代鈞の汪康年宛書簡、『汪康年師友書札』二七八二頁)というような反響からも一斑を窺

うことができる。

一方、王國維も正に日本語・英語、數理などの基礎教養を固めた上で、このような讀書から、彼の學問の生涯を開始したのである。現在、一般的に王國維の學術上の關心は、カント、ショーペンハウエルなどの哲學から始まったと思われるが、以上の序文からも見られるように、彼は藤田豐八の指導のもとに明治二十年から三十年代頃の新史學に最も早く接觸し、その感化を受けていたのである。後に、一九〇〇年の日本留學も藤田豐八の勧めによって行つたし、また西洋の哲學・社會學・心理學・教育學等廣い讀書も、やはり藤田豐八の指導のもとで進めていたのである。

『對支回顧錄』の中の「藤田豐八略傳」で、「日本の支那に關する新刊書を漢譯して公布したが、是れ實に清末における新學勃興の先驅を爲したもので」と評價したことは、學界ではなお疑問視されているが、以上述べてきた事實が明示するように、その評價は的を射ているであらう。

このような恩師の藤田豐八に對して、王國維も生涯にわ

羅振玉・王國維と明治日本學界との出会い（錢）

たつて彼の學術と人格に高い尊敬を拂っていた。上ですでに引用したように、王國維は、當時既に「藤師學術湛深、其孜孜誨人不倦之風尤不易及。開歲以後未交一文之脩、而每日上講堂至五點鐘、（彼中學堂教習至多不過三點鐘）其爲中國不爲一己之心、固學生所共知」と、藤田の學問と人格を深く理解しており、後に立派な學者になつてからも、「藤田師」に對して「受業國維」と自稱していた。残念なことに今まったく残っていないが、王國維はかつて多くの手紙を藤田に送り、そのことは藤田の夫人にも熟知されていたようである。例えば、藤田の甥の曾我部氏は次のように回憶している。

そんなことで伯母も、非常に可愛がつていたようでして、ワンさん、ワンさんと言っていました。彼からの手紙は伯母は大部分まで取つて置いていました。……その机の引き出しが二つあつて、その一方の方に王國維の手紙を一杯入れて、伯母が保存していたんです。

……王國維はその前年の昭和二年の夏に自殺したのでありますが、東京へきて、伯母から「ワンさんはどう

して死んだのだろうか。ワンさんの手紙はこのようにとつてある」と言つて、多數の手紙をみせてくれました。〔先學を語る——藤田豊八博士——〕一八三頁〕

もしこれらの手紙が残っていたら、數的にも質的にも羅振玉宛ての書簡と唯一匹敵できる貴重な學術史の資料になっていたであらう。このエピソードにも、彼ら師生の間に流れていた深い感情が溢れている。

一九〇〇年、庚子の變により東文學社が解散させられるまで、王國維は學社で二年半の學生生活を送った〔自序〕による〕。その頃から王國維の日本語は目に見えて進歩し、まだ本格的な論文、あるいは譯著はあまりないものの、後の獨學を遂行するために必要な外國語、自然科學及び社會・人文科學の基礎知識をしっかりと身につけたのである。羅振玉も『農學報』、東文學社の經營によつて、王國維、樊炳清、沈紘などの翻譯人材を養成し、日本書籍を主にした大量の翻譯の經驗を積み、内外における交遊も廣げて、情報源を確保できるようになった。それらの事業は、また後の中國における最初の教育専門誌『教育世界』の創刊を

可能とする基礎を築いたのである。

羅振玉と王國維は、辛亥革命（一九一一年）を避けて日本に渡り、東洋學を中心とした當時の日本の學術界と大きな関わりをもち、ことに京都の東洋學者と直接に交わったことはよく知られている。その際、日中の學術界の間でどのように相互に刺激しあつたのか、それはまた大きな問題であるが、以上から見てきたように、彼らは日本に渡る前においても、實は明治日本の學術文化と密接な関わりがあつたのである。それについて、拙稿「青年時代の王國維と明治學術文化——『教育世界』雜誌をめぐる」〔日本中國學會報〕第四十八集、一九九六年十月〕の中でその一側面を明らかにしたが、この論文ではさらに羅・王という二人の學者の人生を『教育世界』雜誌發刊（一九〇二）前の時期まで追跡しながら、同時代の日本の學界とどのような契機で接觸し、具體的にどのような交わりが行われていたかを通して、清末の多岐な社會變動における學術文化のありかたを探り、それと明治の日本との関わりについて考察を試みてきた。それは單に個別的な學問が誰から誰に傳えてい

たかといった問題ではなく、學術史における日中兩國の「近代」、ひいては東洋の近代文化の實質及び變容過程と關わる大きな問題に連なるものである。

注

- ① 東文學社についての最近の研究は、主に陳鴻祥『王國維與文學』（陝西人民出版社、一九八八年）、『王國維與近代東西方學人』（天津古籍出版社、一九九〇年）、『王國維年譜』（齊魯書社、一九九一年）及び大川俊隆『上海時代の羅振玉——「農學報」を中心として——』（「國際都市上海」、産研叢書一、大阪産業大學産業研究所、一九九五）などがある。
- ② それについては、『國民之友』・『日本人』など一定したイデオロギーを主張する雑誌から、『東亞之光』・『東洋哲學』・『東亞學會雜誌』などの學術専門誌に至るまで、廣くうかがうことが出来るが、とりわけ日清戰爭の機運に應じるかのようにな創刊された博文館の總合雜誌『太陽』の輿論展開は、見事にこのような時代の動きを提示してくれる。
- ③ 原文には、「十元」の前に一字の空白があり、おそらく何十元かはまだ決まっていなかったとのことであろう。次の引用にもまた同じ表示が出てくる。
- ④ 『中國近代期刊篇目匯錄』の『農學報』の目次によつて、第一冊と第二冊の二回にわたつて掲載されている。ここでは

羅振玉・王國維と明治日本學界との出会い（錢）

『農學叢書』第一集（16—1—B冊、京都大學付屬圖書館藏）による。

- ⑤ 『汪康年師友書札』三三〇六頁。原札には年が記されていないが、「敝國近時喪、皇太后朝堂頗靜肅」という一文があり、これは一八九七年一月十一日崩御の英照皇太后的ことを指しているだろう。それによつて、この札は一八九七年に書かれたものと分かる。
- ⑥ 『東文學社告白』（『農學報』第二十五冊、一八九八年三月）：「本社已於上月十八日開學。此刻尙有餘額……」。
- ⑦ 『中國近代期刊篇目匯錄』には記されていない。ここでは注①の大川氏の論文二三四頁による。
- ⑧ 『東文學社社章』は『農學叢書』第一集、京都大學付屬圖書館藏版の16—1—B冊に見えるが、『中國近代期刊篇目匯錄』には記述されていない。注①の大川氏の論文二三一頁によると、もとより『農學報』第十四冊（一八九七年十一月）に載つたという。また『東亞學會雜誌』第二編第二號（明治三十一年二月）にも載せられ、金井保藏氏の次のような簡単な説明も附されている。「この學社は時務報諸氏の創立に係る其の告白を案するに日本文學士を延聘して教習となし専ら東文を課し舊曆正月より開學すべきにつき志願者は正月十五日迄に農學報館に申出へし左すれば便に隨ひて試験の上入學を許すべしと日本文學士とは藤田氏なるべし」
- ⑧ 王國維「自序」（『靜庵文集續編』）：「次年、社中兼授數

學・物理・化學・英文等」；羅振玉『集蓼編』（十一頁）：「乃謀創立東文學社，以東文授諸科學」。

- ⑨ 藤田豐八は羅振玉の『農學報』・東文學社以外に、また上海江南製造局の工藝學堂の翻譯の聘にも就いていたようである。次の資料からも證明できる。「工藝學堂、一八九八年始設立、……課本選擇歐美各國及日本的各種工藝書籍切於實用者首先翻譯、還加聘日人藤田豐八協助翻譯。」（『江南造船廠廠史・一八六五—一九四九』、江蘇人民出版社、一九八三年）
- ⑩ 內藤湖南「燕山楚水」；羅振玉「滿州寫真帖序」、「祭內藤湖南博士文」。
- ⑪ 「汪康年師友書札」三三四五頁。
- ⑫ 王國維の汪康年宛の書簡（『王國維全集・書信』二十一頁）。
- ⑬ 許家惺の汪康年宛の書簡（『汪康年師友書札』三六〇八頁）；王國維の許家惺宛の書簡（『王國維全集・書信』一一五頁）による。

付録：

藤田豐八の譯著目錄

- 1 「蜜蜂飼養法」花房柳條（著） 藤田豐八（譯） 北洋官書局 一八九三年（光緒十九年）
- 2 「中國蠶務情形」（譯農事報）「農學報」第六、十二冊、一八九七年七、十月

- 3 「治蠶蛆法」（譯日本農會報）同上第六冊、一八九七年七月
- 4 「蠶桑實驗說」（松永伍作者）同上第十一、十五、二十九、四十一冊、一八九七年九月十一月、一八九八年五月八月
- 5 「歐美諸國需用日本絲情形」（譯日本農會報）同上第十一、十二冊、一八九七年十月
- 6 「日茶勁敵」（譯日本農會報）同上第十一冊、一八九七年十月
- 7 「除蟲菊得蠶答問」同上
- 8 「蠶蛆答問」（譯日本農會報）同上
- 9 「以池泥製堆肥法」（同上）同上
- 10 「誘蛾燈說」（同上）同上第十二冊、一八九七年十月
- 11 「蠶種查驗法」（明治三十年三月十九日頒、同上）同上第十三冊、一八九七年十一月
- 12 「中國煙草情形」（譯日本農會報）同上第十四冊、一八九七年十一月
- 13 「中國蠶桑情形續報」（譯農事新報）同上
- 14 「論浮塵子之發育」（譯日本農會報）同上
- 15 「西伯利之日本茶情形」（譯農事新報）同上第十五冊、一八九七年十一月
- 16 「浮塵子調查」（譯日本農會報）同上第十六冊、一八九七年十一月
- 17 「稻熱病因及其豫防法」（同上）同上第十七、二十一冊

一八九七年十二月、一八九八年二月

八年三月

- 18 「製茶價格之比較」(譯農事新報) 同上
- 19 「茶栽培公司營業成績」(同上) 同上
- 20 「加拿陀需用紅綠茶情形」(譯日本農會報) 同上第十七、十八冊、一八九七年十二月、一八九八年一月
- 21 「中國漆調查」(同上) 同上第十八、十九冊、一八九八年一月
- 22 「美國綿花概況」(譯農事新報) 同上第十九、二十冊、一八九八年一、二月
- 23 「中國沙市日本貨物陳列情形」(譯日本水產匯報) 同上第二十冊 一八九八年二月、
- 24 「美國之竹林」(譯日本山林會報) 同上
- 25 「俄人需用中國茶情形」(譯日本農會報) 同上第二十一冊、一八九八年二月
- 26 「樟樹論」(林學士白河太郎著) 同上第二十二、二十三、三十七冊、一八九八年二、五、七月
- 27 「桑樹霉病問答」(譯日本農會報) 同上第二十三冊、一八九八年二月
- 28 「傳種蠶所哺之桑可否肥之以大豆問答」 同上
- 29 「牛疫症候及豫防法」(譯日本農會報) 同上
- 30 「養豚之必要」(譯日本農會報) 同上
- 31 「水害蟲害後選擇稻種法」(譯日本農會報) 同上
- 32 「紫雲英栽培法」(譯農事新報) 同上第二十四冊、一八九八年五月
- 33 「倉廩熏鼠法」(譯日本農會報) 同上
- 34 「安房縣農會改良稻作之實驗成迹」(同上) 同上第二十五冊、一八九八年三月
- 35 「驅除飛浮塵子法」(同上) 同上
- 36 「日本農會第三十三次農產品評會章程」(同上) 同上第二十六冊、一八九八年四月
- 37 「溫州蜜柑盆栽法問答」(同上) 同上
- 38 「製蘆粟糖法」(日) 稻垣重爲撰 同上第二十七、二十九冊、一八九八年四、五月
- 39 「農產物分析表」(日) 恒藤規隆撰 同上第二十七、三十冊、一八九八年四、五月
- 40 「長野縣南北安曇郡飼養天蠶柞蠶情形」(譯日本農會報) 同上第二十八冊、一八九八年四月
- 41 「蟲害水害善後策」(同上) 同上二十八冊、二十九冊、一八九八年四、五月
- 42 「驅除害蟲用之注射器」(譯興農雜誌) 同上第二十八冊、一八九八年四月
- 43 「豫防害柑橘樹鱗蟲法」(譯昆蟲雜誌) 同上
- 44 「人工孵化鮭魚之良迹」(譯日本水產會報) 同上
- 45 「多收良茄子法」(譯農事新報) 同上第二十九冊、一八九八年五月
- 46 「松永伍作論清國蠶業」(譯日本農會報) 同上第三十、三

十一冊、一八九八年五月

47 「論人造絹絲」(譯日本農會報) 同上

48 「泰西農具及獸醫治療器械圖說」(日本駒場農學校原本) 同上第三十一、三十七冊、一八九八年五月、七月

49 「和歌山縣日高郡害蟲驅除豫防約章」(譯昆蟲雜誌) 同上第三十一、三十二冊、一八九八年五月、六月

50 「第二回水產博覽會參觀報告」(譯大日本水產會報) 同上第三十二、三十四冊、一八九八年六月

51 「高麗人參情形報告」(譯農事新報) 同上第三十五冊、一八九八年七月

52 「驗糖簡易方」(日本農務局本) 同上

53 「農工銀行法」(譯大和講農雜誌) 同上第三十六、三十八冊、一八九八年七月、八月

54 「栽培稻法」(譯興農雜誌) 同上第三十八冊、一八九八年八月

55 「養鷄年中行事」(譯日本農會報) 同上第三十九冊、一八九八年八月

56 「秧田螟蛾捕殺新法」(同上) 同上

57 「保護益蟲」(同上) (日) 農學士向坂幾三郎 同上

58 「落花生之利益及耕種法」(同上) 第四十冊、一八九八年八月

59 「製紙法」(譯日本山林會報) 第四十一冊、一八九八年八月

60 「養鯉法」(譯日本水產會報) 第四十一、四十四冊 一八九八年、九月

61 「美國種蘆粟栽製試驗表」日本駒場農學校編 第四十一、四十二、四十五冊、一八九八年八月、十月

62 「麻栽製法」(日) 高橋重郎著 第四十一冊、一八九八年八月

63 「灌田要旨」(譯農民報) 第四十四冊、一八九八年九月

64 「灌溉水量揚水機等答問」(譯日本農會報) 第四十五冊、一八九八年十月

65 「記比利時農會規模之善」(同上) (日) 農學士井川常次郎 第四十六、四十九、五十冊、一八九八年十月、十一月

66 「千葉縣試種陸稻成迹」(同上) 第四十七冊、一八九八年十月

67 「印度及錫蘭茶業成迹」(同上) 第四十八冊、一八九八年十一月

68 「在苗田捕殺螟蛾之一法」(同上) 同上

69 「法國苹果酒逐年銷售額」(同上) 第五十冊、一八九八年十一月

70 「豫防稻熱病法」(同上) 第五十一冊、一八九八年十二月

71 「箱形麥架」(同上) (日) 沼倉告兵衛 第五十二冊、一八九八年十二月

72 「種麥改良法一斑」(同上) 第五十三冊 一八九八年十二月

73 「臺灣所產芋麻說」(同上) 第五十四、五十五冊 一八九九年一月

74 「甘藍栽培法」(譯興農雜誌) 同上

75 「松葉織毯」(譯日本山林會報) 同上

76 「調查水麥成迹要略」(譯日本農會報) 第五十五冊、一八九九年一月

77 「試驗器械製茶」(同上) 第五十六冊、一八九九年一月

78 「蟹之罐藏法」(譯日本水產會報) 同上

79 「煙草栽培法」(譯日本農會報) 第五十七冊、一八九九年二月

80 「製茶輸出西比利亞之設計」(同上) 第五十八冊、一八九九年二月

81 「害蟲飼育室」(譯昆蟲雜誌) 同上

82 「德英美三國每年用酒額」(譯日本農會報) 同上

83 「牛莊豆油豆粕製造業狀況」(同上) 第五十八、五十九冊、一八九九年二月

84 「沖繩縣國頭咖啡品評」(同上) 第五十九冊、一八九九年二月

85 「杞柳栽培法」(同上)(日) 花井藤一郎述 第六十、六十一冊、一八九九年三月

86 「救荒說」(同上) 第六十一、六十二冊、一八九九年三月

87 「德國漁業之進步」(譯日本水產會報) 第六十二冊、一八九九年三月

88 「養蠶法」(同上) 第六十三冊、一八九九年四月

89 「法國水產學校」(同上) 第六十四冊、一八九九年四月

90 「汕頭地方鰻魚景況」(同上) 第六十四、六十五冊、一八九九年四月

91 「椎茸製造法」(譯日本農會報)(日) 島口金之助 第六十五冊、一八九九年四月

92 「調查中國農商務」(同上) 同上

93 「自動製絲機器」(譯蠶業新報) 同上

94 「蠶蛹製造肥料」(同上) 同上

95 「山梨縣所定植麥方法標準」(譯大日本農會報) 第六十六、六十七冊、一八九九年五月

96 「桑園熏煙法」(譯日本農會報) 第六十七冊、一八九九年五月

97 「美國水產會」(譯大日本水產會報) 同上

98 「萬國水產大會」(同上) 同上

99 「果實効用」(譯大日本農會報) 同上

100 「養魚孵化試驗成迹」(譯大日本水產會報) 第六十八冊、一八九九年五月

101 「果樹盆栽法」(譯日本農會報) 第六十九冊、一八九九年六月

102 「飼野鴨之利益」(譯興農雜誌)(日) 村上長造 同上

103 「栽培葱頭法」(譯日本興農雜誌) 第七十冊、一八九九年六月

- 104 「試種薏苡成迹」(譯日本農會報)(日) 石川良吉述 同上
- 105 「論牛疫」(譯太陽報) 第七十一冊、一八九九年六月
- 106 「北海道各郡植稻試驗法」(譯日本農會報)(日) 鳥口金之助 第七十二冊、一八九九年七月
- 107 「木材防腐法」(譯日本山林會報) 第七十三冊、一八九九年七月
- 108 「調查中國山東省山繭狀況」(譯大日本農會報) 第七十四冊、一八九九年七月
- 109 「粳糠之効用」(同上) 同上
- 110 「林檎釀酒」(同上) 第七十五冊、一八九九年八月
- 111 「美國女子利達委羅道特傳」(譯興農雜誌) 第七十六冊、一八九九年八月
- 112 「碎牛馬骨粉之法」(譯大日本農會報) 同上
- 113 「深澤氏視察清國蠶業演說」(譯蠶業新報) 第七十七冊、一八九九年八月
- 114 「中國蠶之寄生蠅」(同上) 第七十八冊、一八九九年九月
- 115 「大麥水培法」(譯大日本農會報) 同上
- 116 「稻田尺蠖驅除法」 同上
- 117 「製絲用水質試驗」(農商務省講習所技師農學士辻暢太郎氏調查)(譯蠶業新報) 第七十九、八十二冊、一八九九年九月、十月
- 118 「山東省農況」(譯通商匯纂) 第八十二冊、一八九九年十月
- 119 「沙市農況」(同上) 同上
- 120 「金魚飼育法」(譯太陽報) 第八十三冊、一八九九年十月
- 121 「製造樟腦新發明」(譯農桑雜誌) 同上
- 122 「意法蠶況」(譯大日本農會報) 同上
- 123 「論植物之衛生」(同上) 第八十四冊、一八九九年十月
- 124 「盆栽梅培養法」(譯農桑雜誌) 同上
- 125 「馬鈴薯栽培法」(同上) 第八十五冊、一八九九年十一月
- 126 「銀杏實蒔法」(同上) 同上
- 127 「橘類貯藏法」(同上) 第八十六冊、一八九九年十一月
- 128 「野稗絕滅法」(同上) 同上
- 129 「法國養鷄學校」(同上) 同上
- 130 「池沼利用法」(同上) 同上
- 131 「玫瑰栽培法」(同上) 同上
- 132 「金山寺醬製法」(同上) 同上
- 133 「簡易醬油製造法」(同上) 同上
- 134 「竹葉爲肥料」(同上) 同上
- 135 「花甘藍栽培法」(同上) 第八十七冊、一八九九年十一月
- 136 「除蟲菊莖枝製驅蚊品」(同上) 同上
- 137 「植樹秘法」(同上) 同上
- 138 「競犁會」(同上) 同上
- 139 「三豐郡畜牛會品評會概況並會則」(譯新農報) 同上
- 140 「鑑別土壤簡法」(譯北海道農事週報) 第八十八冊、一八九九年十二月

- 141 「新發明驅除毛蟲法」(同上) 同上
 142 「過燐酸肥料効用」(同上) 同上
 143 「富山縣驅除害蟲講習會規條」(譯日本農會報) 同上
 144 「簡易罐藏製法」(譯新農報) 同上
 145 「養蠶器新發明」(同上) 同上
 146 「豫防茄子之立枯病」(同上) 同上
 147 「胡瓜栽培法」(同上) 同上
 148 「蛙之奇性」(同上) 同上
 149 「意大利收穫實況」(譯日本農會報) 同上
 150 「煙草乾燥法」(譯農業雜誌) 第八十九冊、一八九九年十二月
 151 「中國產棕櫚皮狀況」(同上) 同上
 152 「種藍法」(同上) 同上
 153 「大冬瓜栽培法」(同上) 同上
 154 「燕麥効用及栽培法」(同上) 同上
 155 「茄子貯藏法」(譯新農報) 第九十冊、一八九九年十二月
 156 「製造桑皮綿」(譯新農報) 同上
 157 「製造松莢法教授」(同上) 同上
 158 「日本生絲屑絲及綿累年增長比較」(譯農商務統計表) 同上
 159 「日本絲產額及輸出額逐年增長比較」(同上) 同上
 160 「明治以來米價表」(譯新農報) 同上
 161 「預防霜害法」(同上) 同上

羅振玉・王國維と明治日本學界との出会い(錢)

- 162 「製橘水法」(同上) 同上
 163 「電氣殺蟪」(同上) 同上
 164 「農事影燈演說會」(同上) 同上
 165 「青蠅驅除法」(同上) 同上
 166 「蠶簇新發明」(同上) 同上
 167 「鳥類於植物之効能」(同上) 同上
 168 「笋栽培記」(同上) 同上
 169 「桐樹栽培法」(同上) 第九十一冊、一九〇〇年一月
 170 「蠶蛆寄生之主物試驗」(譯日本農會報) 同上
 171 「稻田旱害豫防策之一斑」(同上) 同上
 172 「輕便除蟲液製法」(譯新農報) 同上
 173 「驅除螟蟲以採卵爲最良法說」(譯日本農會報) (日) 名和靖述 第九十二冊、一九〇〇年一月
 174 「驅除黑色椿象法」(同上) (日) 中井安太郎述 同上
 175 「農務小學校學林設置章程」(譯九和講農雜誌) 第九十三冊、一九〇〇年一月
 176 「桑林豫防霜害法」(譯興農雜誌) 同上
 177 「製造梅酒法」(譯農業雜誌) 同上
 178 「鷄卵貯藏法」(同上) 同上
 179 「小麥播種之一新法」(同上) 同上
 180 「葱栽培法」(同上) 同上
 181 「蠶蛹貯藏法」(同上) 同上
 182 「美國海產油貿易考」(譯水產會報) 第九十四冊、一九〇〇

○年二月

183 「柏樹栽培法」(譯農業雜誌) 第九十五冊、一九〇〇年二月

184 「麥稈漂白新法」(譯新農報) 同上

185 「蘭草(即席草)栽培法」(同上) 同上

186 「世界生絲產額」(同上) 同上

187 「世界生絲消費數及製產額」(同上) 同上

188 「梨實害蟲驅除法」(譯興農雜誌) 同上

189 「除蟻害法」(譯農業雜誌) 同上

190 「茶事試驗報告二」日本農商務省本 同上

191 「杉扁柏樹害蟲」(譯日本山林會報)(日)佐藤振五郎 第九十六冊、一九〇〇年二月

192 「俄國農業器械之輸入」(譯農業雜誌) 第九十八冊、一九〇〇年三月

193 「美國蠶業」(同上) 同上

194 「農談會及短期農事講習所」(同上) 同上

195 「蠶蛹油」(同上) 同上

196 「農事試驗要旨」(同上) 同上

197 「牽牛花栽培法」(同上) 同上

198 「赤米探原」(同上) 同上

199 「柔稻變質」(同上) 同上

200 「作甘藷粉法」(同上) 同上

201 「製介類標本法」(同上) 同上

202 「論煤油除蟲」(譯山林會報) 同上

203 「製接蠟法」(譯興農雜誌) 第九十九冊、一九〇〇年三月

204 「植樹一得」(同上) 同上

205 「甘柿去澀味法三則」(譯農業雜誌) 同上

206 「蒸汽乾繭器改良發明」(同上) 同上

207 「論植物病理研究所」(譯興農雜誌) 同上

208 「論蒸汽耕耘」(譯農業雜誌) 同上

209 「驅雀便法」(同上) 同上

210 「造林試驗場」(同上) 同上

211 「桐樹防腐法」(同上) 同上

212 「桑間種茶法」(譯農業雜誌) 同上

213 「果園氣薰法」(譯新農報) 同上

214 「藝稻新法」(同上) 同上

215 「臧姜法三則」(譯農業雜誌) 同上

216 「砂田善後策」(同上) 同上

217 「水產講習所傳習規則」(譯水產會報) 第一〇〇冊、一九〇〇年四月

218 「深耕說」(譯農業雜誌) 同上

219 「種西瓜法」(同上) 同上

220 「蝦蟆効用說」(同上) 第一〇一冊、一九〇〇年四月

221 「除植物之害蟲害菌法」(同上) 同上

222 「濕田排水法二則」(同上) 同上

223 「水產講習所商議委員規程」(譯水產會報) 同上

- 224 「試驗蠶病成迹報第一」 日本商務省編 同上
- 225 「養栽製法」 (譯日本農業雜誌) 第一〇二冊、一九〇〇年四月
- 226 「製糖煉炭法」 (譯日本蠶業新報) 同上
- 227 「造果林法」 (譯日本山林會報) 同上
- 228 「梨貯藏法」 (譯農業雜誌) 同上
- 229 「簡易豫防麥奴法」 (同上) 同上
- 230 「杉柏不利移植說」 (譯山林會報) 同上
- 231 「作蠶簇材料之佳品」 同上
- 232 「新式藏蠶種器」 (譯蠶業新報) 同上
- 233 「集魚燈新制」 (譯水產會報) 同上
- 234 「水戶義公移植水產物」 (譯水產會報) 同上
- 235 「放稚鯉時期」 (同上) (日) 小松春類 同上
- 236 「試驗蠶病成迹報第二」 日本農商務省編
- 237 「美國家畜況狀」 (譯太陽報) 第一〇三冊、一九〇〇年五月
- 238 「線絲述驗」 (譯蠶業新誌) 同上
- 239 「除松蟲害蟲法」 (譯山林會報) (日) 河合礦次郎 第一〇四冊、一九〇〇年五月
- 240 「海藻含沃度之分量」 (譯水產會報) 同上
- 241 「新創製乾蝦剥皮器」 (同上) 同上
- 242 「茶葉勁敵」 (譯新農報) 同上
- 243 「支那南部漁業及貿易狀」 (譯水產會報) (日) 學藝委員下
- 啓助 第一〇五冊、一九〇〇年五月
- 244 「捕蛾新器」 (譯農業雜誌) 同上
- 245 「創造蠶綿」 (同上) 同上
- 246 「法國蠶會」 (譯蠶業新報) 同上
- 247 「池水去毒法」 (譯水產會報) 同上
- 248 「殖魁蛤法」 (同上) 第一〇六冊、一九〇〇年六月
- 249 「製罐藏品之蒸罐構造法」 (同上) 同上
- 250 「法國農業教育一斑」 (譯新農報) 同上
- 251 「山東產粟況狀」 (譯興農雜誌) 同上
- 252 「試驗蠶病成迹報第三」 日本農務省編 第一〇六、一〇七冊 一九〇〇年六月
- 253 「用霉菌除蟲法」 (譯昆蟲世界) 第一〇七冊、一九〇〇年六月
- 254 「創立三重縣水產試驗場豫計」 (譯水產會報) 同上
- 255 「栽棕桐法」 (譯新農報) 第一〇八冊、一九〇〇年六月
- 256 「林產述用」 (譯興農雜誌) 同上
- 257 「昆蟲展覽會規則」 (譯昆蟲世界) 同上
- 258 「夜間昆蟲講習會」 (同上) 同上
- 259 「論種苜蓿之利」 (譯農業雜誌) 第一〇九冊、一九〇〇年七月
- 260 「漂白粉辨」 (譯蠶業新報) 同上
- 261 「鵝卵內白皮之功用」 (譯新農報) 同上
- 262 「美國農產總額」 (同上) 同上

- 263 「大日本農會會員之增加」(同上) 同上
- 264 「蠶病治毒法」(譯大日本農會報) 同上
- 265 「木屑利用說」(譯興農雜誌) 同上
- 266 「紫爪草之効用」(同上) 同上
- 267 「道旁植木說」(同上)(日) 田中芳男 同上
- 268 「製麥稈紐(中國稱草帽纜)法」(譯日本農會報) 第二〇冊、一九〇〇年七月
- 269 「泊夫藍考」(譯農會報) 同上
- 270 「植物保種說」(譯興農雜誌) 同上
- 271 「印度藍栽製概要」(譯新農報) 第一一一、一二二冊、一九〇〇年七月
- 272 「煙草栽培法」(同上)(日) 小牧英太郎 第一一二、一二三冊、一九〇〇年七、八月
- 273 「察樹勢法」(同上) 第一二三冊、一九〇〇年八月
- 274 「世界小麥產額」(同上) 同上
- 275 「除種還元法」(同上) 第二一四冊、一九〇〇年八月
- 276 「播種實驗」(同上) 同上
- 277 「新式播種器」(同上) 同上
- 278 「種西瓜法實驗」(同上)(日) 坂本運平報 同上
- 279 「樟樹下種法」(同上) 同上
- 280 「仙人掌栽培法」(譯農業雜誌) 第一一四、一二七冊、一九〇〇年八、九月
- 281 「冬蟲夏草」(譯昆蟲世界) 同上
- 282 「寄生蟲保護器」(同上) 同上
- 283 「記蟾蜍」(同上) 同上
- 284 「甘露製酢法」(譯新農報)
- 285 「飼蟲法」(譯昆蟲世界) 第一一五冊、一九〇〇年八月
- 286 「藝弧法」(譯新農報) 同上
- 287 「記養蟲室」(譯昆蟲世界) 同上
- 288 「造林新案」(譯新農報) 同上
- 289 「魚介藻分析表」(譯大日本水產會報) 第一一六冊、一九〇〇年九月
- 290 「養鯉談」(同上) 同上
- 291 「種子發生效力年限表」(譯新農報) 同上
- 292 「論鳥類啄食害蟲之益」(譯昆蟲世界) 同上
- 293 「蟲草生蟲癭說」(譯昆蟲世界) 第一一七冊、一九〇〇年九月
- 294 「蠹蟲害稻說」(同上) 同上
- 295 「落花生栽培法」(譯新農報) 同上
- 296 「蟲害預防法」(譯昆蟲世界) 同上
- 297 「論昆蟲之香氣」(同上) 同上
- 298 「除蟲劑試驗說」(同上) 第一一八冊、一九〇〇年九月
- 299 「飼魚說」(譯水產報) 同上
- 300 「米谷貯藏法」(譯米澤有爲會雜誌) 同上
- 301 「意大利漁業統計」(譯水產報) 同上
- 302 「除蟲菊苗枯死豫防法」(譯新農報) 同上

- 303 「種時期節一斑」(同上) 同
 304 「雜草製紙」(譯工業雜誌) 同上
 305 「螢話」(譯昆蟲世界) 第一一九冊、一九〇〇年十月
 306 「印度之狄以克材輸出」(譯工業化學雜誌) 同上
 307 「製油機圖說」(譯工藝化學雜誌)(日) 鈴木菊次郎 第一二〇冊、一九〇〇年十月
 308 「全世界砂糖產額」(同上) 同上
 309 「製造木纖維改良法」(同上) 同上
 310 「防水紙」(同上) 同上
 311 「製紙用之糊製法」(同上) 同上
 312 「革屑利用」(同上) 同上
 313 「樟葉採腦試驗成迹」(同上)(日) 理學士守屋物四郎 第一二二冊、一九〇〇年十月
 314 「爪哇砂糖業狀況」(同上)(日) 下關米半治 第一二二、二三冊、一九〇〇年十一月
 315 「人工調製大氣法」(同上) 第一二三冊、一九〇〇年十一月
 316 「防蔽法」(同上) 同上
 317 「東亞日本綿紗銷場」(同上) 第二二四冊、一九〇〇年十一月
 318 「播草花種法」(譯興農雜誌) 同上
 319 「茄種採收法」(同上) 同上
 320 「蜻蛉保護法」(同上) 同上

羅振玉・王國維と明治日本學界との出会い(錢)

- 321 「輕便手用完全耕作者」(同上) 同上
 322 「製陸地法」(譯工業雜誌) 同上
 323 「印度紡績業之發達」(同上) 同上
 324 「鷄卵簡易試驗器」(譯新農報) 同上
 325 「除牛角法」(同上)(日) 中村勇 同上
 326 「治茄子立枯病」(同上) 同上
 327 「論石灰肥料」(同上)(日) 農學士井田鑑吾 同上
 328 「夏季貯卵法」(同上) 同上
 329 「除浮塵子劑試驗成迹」(譯昆蟲世界) 第一二五冊、一九〇〇年十二月
 330 「鷄卵貯藏法」(譯新農報) 第二二七冊、一九〇〇年十二月
 331 「世界綿花產額」(譯大日本農會報) 同上
 332 「魚鱗利用」(譯大日本水產會報) 同上
 333 「蚊之產卵說」(譯昆蟲世界)(日) 名和昆蟲研究所助手福井克雄 同上
 334 「論蚊」(同上)(日) 生熊興一郎 同上
 335 「苗田澄水法」(譯新農報) 同上
 336 「殖鮑法」(譯大日本水產會報)(日) 今野虎吉述
 337 「顏料篇」 江守襄吉郎(著) 上海江南製造局(一九一一年前版) 二冊(江南製造局所刻書二〇三—二〇四) 江南製造局所刻書の番號から、下記の本と大體同期と推測できる
 338 「物理學」 飯盛挺造(著) 藤田豐八(譯) 王季烈(重

- 譯) 上海江南製造局 一九〇〇年 三編十二冊 (江南製造局所刻書 二一八—一二九)
- 339 「培菊法」(譯新農報) (日) 前農商務大臣曾根荒助 第一二八冊、一九〇一年一月
- 340 「玄米(即已去壳之糙米)代稻種種法」(譯大日本農學會) 同上
- 341 「飼養鈴蟲法」(譯昆蟲世界) (日) 藤枝項三
- 342 「法國之製造煙草業」(譯新農報) 同上
- 343 「電氣助長」(譯大日本農會報) 同上
- 344 「大和吉野葛粉製造法」(譯大日本農會報) 第一二九冊、一九〇一年一月
- 345 「茄子立枯豫防法」(同上) 同上
- 346 「爪哇薯製酒精法」(同上) 同上
- 347 「冷水田改良法」(同上) 同上
- 348 「熏煙魚製造業之實況」(譯大日本水產會報) 第一三〇冊、一九〇一年一月
- 349 「雞之下痢病」(譯新農報) 同上
- 350 「稻田養鯉法」(譯日本水產會報) 第一三一、一三二冊、一九〇一年二月
- 351 「貯藏鷄卵法及查新否法」(譯大日本農會報) 第一三三冊、一九〇一年二月
- 352 「美國之養蠶業」(譯時事新報) 同上
- 353 「施人糞於蔬菜之害」(譯新農報) 同上
- 354 「適於赤粘土質之植物」(譯農業雜誌) 同上
- 355 「棕櫚種安全發芽法」(同上) 同上
- 356 「樹陰地之植物」(同上) 同上
- 357 「苜蓿說」(譯大日本農會報) 第一三三冊、一九〇一年二月
- 358 「小型鐵鎌」(同上) 同上
- 359 「搔苗捕蟲網」(同上) 同上
- 360 「明治三十二年日本全國產米狀況」(同上) 同上
- 361 「浸種用水研究成迹」(同上) (日) 農學士吉村清尙 第一三四冊、一九〇一年三月
- 362 「牡丹培養法」(譯農業雜誌) 同上
- 363 「浮塵子敵蟲發見」(譯昆蟲世界) 第一三五冊、一九〇一年三月
- 364 「府縣農事試驗場規程」(譯大日本農會報) 同上
- 365 「美國麥薩淺脫州農科大學記」(譯農業雜誌) 同上
- 366 「福井縣農會農事試驗場」(譯新農報) 第一三六、一三七冊、一九〇一年三、四月
- 367 「彈力機關車發明之來歷」(譯農業雜誌) 第一三七冊、一九〇一年四月
- 368 「蠶癩療治術發明之來歷」(譯新農雜誌) 同上
- 369 「水田三毛作法」(譯大日本農會報) 同上
- 370 「樟葉採腦說」(譯興農雜誌) 同上
- 371 「黃蜀葵栽培法」(譯農會報) 同上
- 372 「鯨之體量」(譯水產會報) 同上

- 373 「鯨之強力」(同上) 同上
- 374 「鯨之漂着」(同上) 同上
- 375 「鯨之奇斃」(同上) 同上
- 376 「浸稻種法」(譯新農報) 第一三八冊、一九〇一年四月
- 377 「豆科植物之研究」(譯大日本農會報) 同上
- 378 「石灰利蠶說」(同上) 第二三九冊、一九〇一年四月
- 379 「小學校設農科策」(同上) 同上
- 380 「上海海貨商情」(譯水產會報) 第一四〇冊、一九〇一年五月
- 381 「撒哈拉沙漠拓殖」(譯農會報) 一九〇一年五月
- 382 「卵色試驗」(譯蠶業新報) 第一四一冊、一九〇一年五月
- 383 「上簇厚薄試驗」(譯蠶業協會報) 第一四二冊、一九〇一年五月
- 384 「飼器乾濕試驗」(同上) 同上
- 385 「法意兩國蠶業」(譯蠶絲會報) 同上
- 386 「濕葉飼蠶試驗」(譯蠶業新報) 第一四三冊、一九〇一年六月
- 387 「美國蠶業」(譯蠶絲會報) 同上
- 388 「耕地整理法」(譯農會報) 第一四四冊、一九〇一年六月
- 389 「批榔說」(譯大日本農會報) 第一四五冊、一九〇一年六月
- 390 「蠶蟲法」(譯新農報) 第一四六、一四七冊、一九〇一年六、七月
- 391 「法國葡萄酒釀額」(譯農會報) 同上
- 392 「人工養蠶飼育試驗成迹概要」(譯東京蠶業講習所報告) 第一四八冊、一九〇一年七月
- 393 「北海道土地官賣章程」 第一四九冊、一九〇一年七月
- 394 「日本水產會成迹概要」(譯水產會報) 第一五〇、一五二冊、一九〇一年八月
- 395 「丹馬郡村教育」(譯農會報) 第一五二冊、一九〇一年八月
- 396 「歐美各國麥產額比較圖」(同上) 同上
- 397 「美國南加洛拉那州茶業」(同上) 同上
- 398 「歐美水產視察談」(譯水產會報) 第一五三冊、一九〇一年九月
- 399 「農商務省官制」(明治三十一年十月二十二日勅令第二百八十二號) 第一五四冊、一九〇一年九月
- 400 「農務試驗場處務規程」(明治二十六年四月十二日訓令第七號) 同上
- 401 「農商務省高等官官等一覽表」 同上
- 402 「農商務省特許局兼任審判官官等」(明治三十二年六月八日勅令第二百三十八號) 同上
- 403 「農商務省勅任文官年俸一覽表」 同上
- 404 「農商務省奏任文官官等相當俸給表」 同上
- 405 「農商務省分課規程」(明治三十一年十月三十日甲第二十號) 第一五五、一五六冊、一九〇一年十月

- 406 「農商務省判任文官等級一覽表」 第一五六冊、一九〇一年十月
- 407 「判任文官月俸表」 同上
- 408 「營林主事補森林監守月俸一覽表」 同上
- 409 「農事試驗場本支場位置管轄區域」 同上
- 410 「關農事試驗場巡迴講話之件道廳府縣」(明治二十六年七月十九日訓令第十九號) 同上
- 411 「府縣農事試驗場國庫補助法」(明治三十二年六月七日法律第二百二號) 同上
- 412 「農商務省文官普通試驗細則」(明治二十一年六月制定) 第一五七冊、一九〇一年十月
- 413 「農會法」(明治三十二年六月八日法律第三百三號) 同上
- 414 「害蟲驅除豫防法」(明治二十九年三月二十四日法律第十七號) 同上
- 415 「害蟲驅除豫防法辦理章程」(明治二十九年三月二十八日省令第六號) 同上
- 416 「害蟲驅除上注意之件」(明治二十九年三月二十八日訓令第五號) 同上
- 417 「農事試驗場官制」(明治二十六年四月七日勅令第六號) 同上
- 418 「請托分析者之心得」(明治二十六年十二月十二日告示第十九號) 第一五八冊、一九〇一年十月
- 419 「府縣農事講習所規程」(明治三十二年八月一日省令第二號) 同上
- 420 「農事講習所設置心得」(明治二十七年八月六日訓令第二十六號) 同上
- 421 「農事試驗場分析手數料之件」(明治二十六年十二月十一日勅令二百三十號) 第一五九號、一九〇一年十一月
- 422 「府縣郡農事水產試驗場農事水產講習所職員並農事林業水產巡迴教師之名稱待遇任免及官等等級配當之件」(明治三十一年十二月十三日勅令第三百四十八號) 同上
- 423 「農事及水產巡迴教師設置心得」(明治二十七年八月十日訓令第二十八號)
- 424 「勸業諮問會及勸業委員設置之件」(明治十六年五月十六日大政官布達第十三號) 同上
- 425 「府縣農事試驗場國庫補助法實施規則」(明治三十二年八月一日省令第十九號) 第一六〇冊、一九〇一年十一月
- 426 「府縣農事試驗場規程」(明治三十二年八月一日省令第二十號) 同上
- 427 「關農事試驗場巡迴演講等之處置心得」(明治二十六年七月內訓) 第一六一冊、一九〇一年十一月
- 428 「印度米作法」(譯新農報) 同上
- 429 「農業教育之主管」(同上) 同上
- 430 「釣鮪述聞」(譯水產會報) 第一六二冊、一九〇一年十二月
- 431 「造洋漆法」 一九〇三 (江南製造局譯書匯刻·甲編)